

『酒吞童子』の古版本について

— 御伽草子本説明に寄せて (二) —

(付・「寛永」刊絵入本「しゆてんとうし」下巻翻刻)

橋 本 直 紀

本誌前号においてわたくしは御伽草子二十三篇の一、「横笛草紙」について考え、二種の古活字版、また明暦刊本との関わりから、御伽草子本「横笛」の性格説明を些か試みた(「横笛瀧口の草子」の古版本について—御伽草子本説明に寄せて—)。即ち、御本「横笛」は、古活字版が有する挿絵第七図とそれに続く最終末部を欠くという瑕疵を別にすれば、その本文・挿絵とも、古活字版にまで遡らせ得ると結論付けた。そして、古活字版と御本の中間に位置する本として、未だその存在の確認されていない、寛永版を想定した。今回は、副題にも示した通り、右「横笛」で見えて来たと同一の視点、同様の手続きで「酒吞童子」を取り上げ、まだまだ不明の点の多い御伽草子本の性格説明、位置付けを試みたと思う。

大きく大江山系と伊吹山系に分類される「酒吞童子」(「しゆてん」の「てん」字は様々に表記されるが、特に必要のない限り本稿では「吞」で統一する)は、両系とも随分多くの伝本が存する。伝本のうち、両系を通じて現存最古のものは、南北朝期の製作とされる香取本「大江山絵詞」(大江山系)であるが、その多数は江戸時代のごく初期から中期にかけて製作された絵巻の類である。そして、それらの殆どは大形であり、三軸とか五軸仕立てとなっており、絵は極彩色の長大なものが多い。他に、奈良絵本に作られたものも多く存する。

ところが、これら現存する豊富な写本系の一群に対して、何故か刊本で残っている本は少ない。

今日までに知り得た「酒吞童子」の刊本は僅かに次の二種・三本のみである(何れも大江山系)。

まず、寛永頃刊本を掲げ、書誌を記す。

(一)〔寛永〕刊絵入大本、下巻のみ、一冊（舞鶴市立西図書館糸井文庫蔵）

黒地に記字つなぎ唐草模様行成表紙。縦二四・二種、横一六・八種。上に黒無地の覆表紙を付す。題簽、後補墨「しゆてんとうし」。内題「しゆてんとうし 下」。本文字高約一九・五種。柱刻「とうし下（丁付）」。全一五丁。毎半葉十行。挿絵、片面四図、四ウ・九オ・一一ウ・一四ウ。印記、一オの内題の下に「糸井文庫」。

備考一、版式、また挿絵の特色よりして、寛永版と認めて良い。下巻のみの写本であるが、他に刊本としては、現時点では次の御伽草子本しか存しないので、その意味でも貴重な本である。

備考二、本書が貴重な版であること、および行論の必要上から、後に挿絵を総て掲載する。また付録として全文を翻刻し、大方の便宜に備えることとする。

それと、御伽草子本として、

(二)〔寛永―寛文〕刊丹緑絵入横本（日本民芸館蔵）

渋川版（右の再印もしくは覆刻）

備考一、御伽草子本は全四七丁、うち挿絵は片面一〇図。

備考二、便宜上、御伽草子本としては渋川版を使用する。

の、都合、二種・三本である。

寛永版は下巻のみしか残っていないが、その本文は、御伽草子本で言えばどの部分からなるのか、またその上巻（或は上・中巻）はどの様に想定し得るであろうか。

寛永版下巻は、「そのうち、しゆてんどうじは。よりみつの御すがたを、めをもはなさず、うちながめ」（岩波大系本「御伽草子」三七五頁5行目より、以下検索の便宜のため、同様に示す）から始まる。御伽草子本の第二八丁目から終りまでの二〇丁分に相当する分量である。単純計算であるが、御本全四七丁のうちの二〇丁分が寛永版下巻の一五丁分に相当しているのであるから、寛永版の完全本はおよそ三五丁分程あったということになるか。寛永版は、もと上（二〇丁程）・下（一五丁）二冊本であったと考えたい（上巻相当の二〇丁分を更に二分して、もと上・中・下三冊本であったとするには無理がある）。

二

以下、具体的な検討に入る。

寛永版と御伽草子本の主要な相違箇所は次の通り。漢字表記と仮名表記の違い、「お」を「へ」「え」「い」「ひ」、また「く」「々」等の表記上の違いは除外するとして、次の如く

八箇所に互つての相違が数えられる(上が寛永版、下が御伽草子本。数字は岩波大系本の頁・行数)。

①これにありおふおにどもよーこれにありあふおにどもよ(三七五・八)へ注、これに近似の例として後文に「いかにありおふおにともよ」(寛・伽トモ同ジ、三七七・二)ともある

②二三へんこそかなでけるー二三へんこそはかなでける(三七七・11)

③ほんぶのちからに、なかゝに、内へ入べきーほんぶのちからに、中々、内へ入べき(三七九・8)

④たのもしくは思へともーたのもしく思ひつゝ(三八〇・1)

⑤心もことはもよはれすー心も言もよばれず(三八二・6)

⑥なげき給はんかなしさよーなげき給はんかなしさよ(三八三・3)

⑦よくゝとゞけてたび給へとーよくゝとゞけてたびたまへ(三八三・8)

⑧一どはなれしわがひめにーどわかれしわがひめに(三八四・8)

これで総てである。①寛「ありおふ」は「ありあふ(有りあふ)」の訛であろうが、①注に記した後文の例をも考え併せれば、両様とも何ら支障なからう。②③は各、文意を全く損なうことのない小異

である。⑤伽「言」は「ことば」と読ませるのであろう。⑥は寛永版の単純な誤刻を伽本が正したものであり、⑦は「と」の無い伽本の方が文章上、通りが良い。結局、相違と言える程のものは④⑥の二例のみとなる。④は、寛「思へとも」より伽「思ひつゝ」の方が通りが良い(三社の神の出現に感じ入っているのであるから、その有難さをそのまま「頼もしく思ひつゝ」とする方が自然であろう)。

⑧は両様、何れも支障ない。こう見て来ると、「酒呑童子」の本文においては、寛永版と御伽草子本の間には相違という程のものはなく、小異の部分も全体に、御伽草子本が寛永版にほんの少し修正を加えたものであつて、伽本は寛永版をそのまま、ほぼ完全に承けていると言ひ得るであらう。「酒呑童子」においては、本文はストレートに寛永版から御伽草子本に繋がると言ひ切つて支障ないものと考えられる。寛永版は現時点では下巻しか存しないが、その上巻はだから、御伽草子本の本文を以て代えても大過ないとも考える。

三

次に、両本の挿絵について見る。

寛永版は下巻のみの零本であるから、挿絵の対比もその限りでしかなし得ないが、寛永版の下巻全四図を、挿絵の前の本文の切れ目と共に御伽草子本全一〇図のうちの終り四図と比較して見れば次の

様になる(圖1~8を参照)。

(1)〔寛・下・第一圖〕—「さげやかなになすべしとの、うたの心とおほえたり」ノアト(三七七・14)

〔伽・第七圖〕(位置・構圖トモ寛永版ニ合致)

(2)〔寛・下・第二圖〕—「らいでんいかづち、天地もひくくはかりなり」ノアト(三八〇・8)

〔伽・第八圖〕(位置・構圖トモ寛永版ニ合致)

(3)〔寛・下・第三圖〕—「いらかをならへて、たてたるは、心もことはも、をよはれす」ノアト(三八二・6)

〔伽・第九圖〕—「かくやおもひしられたり」ノアト(三八二・4) (構圖は寛永版ニ合致、位置ハ小異アリ)

(4)〔寛・下・第四圖〕—「ざづめきわたりてひかへたり」ノアト(三八四・5)

〔伽・第一〇圖〕(位置・構圖トモ寛永版ニ合致)

さて、權圖は、掲出した図版を見て頂いても分かる通り、完全に対応していると言えるであろう。(1)圖、童子の姿と、前に置かれた三方・鉢(盃カ)、扇をかざして舞ういしくま童子、神便鬼毒酒の入った竹筒を持つ頼光。(2)圖、首を切られた鬼形の酒呑童子、その足に付けられた鎖、頼光の甲に噛み付く鬼神の首。(3)圖、頼光主従と、なお奥への案内役に立つ女房たち。(4)圖、喜びのうちに都へ帰

る人々と興、それを見物する路傍の衆。以上、どの絵も実に良く対応しており、前節で見た本文のこのみならず、挿絵においても、御伽草子本は寛永版を承けていることは明白であろう。タテ本とヨコ本の相違をも勘案して、そう断定して支障ないと思う。

(3)圖は、寛永版では頼光主従と二人の女房は屋内に居るが、御伽草子本では二人の女房は縁先に居る。これは、女房たちが、なお奥の鉢を探らんとする頼光主従を案内する場面であるから、御伽草子本の方が、より積極的な文意を汲んだものと見なせようか。寛永版の挿絵を見た伽本絵師の、タテ形の絵をヨコ形に置き直すことと共に見せた妥当で効果的な処置と見たい。なお(3)圖の位置が少しズレていることは不審であるが、この絵は、鬼神を退治してのち「六人の人々は、ひめ君をさきにたて。おくのていを、み給へは」(引用は寛永版)に対応する所であるから、これより少し先にある、囚われの女房たちが救われたことを知って「われもくくと、手をあはせて、なげきかなしむありさまを、物によくくくと、たふれば」(引用、同)云々の所で切る御伽草子本は、悪い。伽本が、字詰め行詰めの関係から、止むを得ず、この様にしたものと考えざるを得ない。寛永版の上巻には、御伽草子本の第六圖までが、必ずや伽本の構圖と同じ鉢でさしはさまれているであろう。寛永版上巻の出現を俟つものである。



图 2 (同·第2图)



图 1 (寛永版·下卷第1图)



图 4 (同·第4图)



图 3 (同·第3图)



图 5 (御伽草子本・第7图)



图 6 (同・第8图)

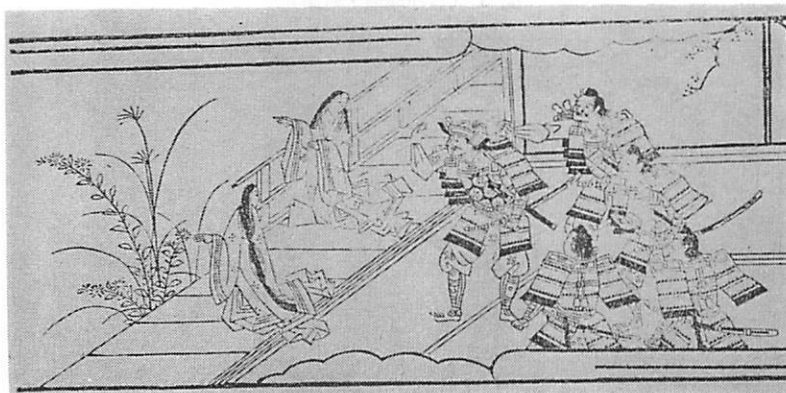


图 7 (同・第9图)



図 8 (同・第10図)



図 9 (古浄瑠璃・零葉)

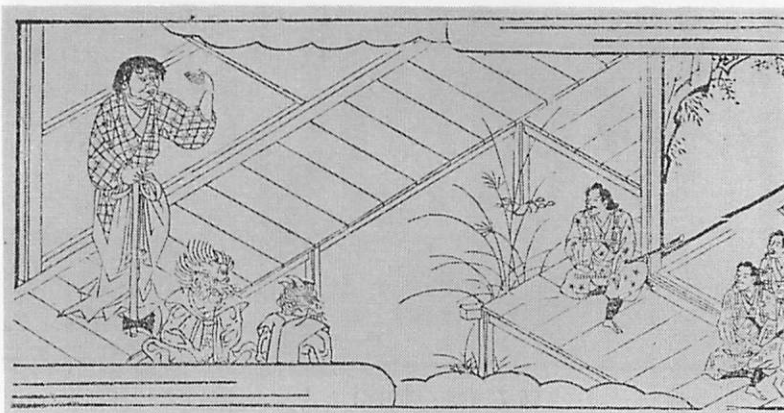


図10 (御加草子本・第5図)

以上、くどい様であるが、第二節で見た本文についての検討、また本節における挿絵の検討から、「酒呑童子」にあつては、御伽草子本は直接に寛永版を承けていると結論して良いと考える。つまり寛永版は御伽草子本の直接拠つた祖本である、と。

四

ここで目を一寸他所に転じる。

『古浄瑠璃正本集』第一増訂版の口絵に「酒天童子」(仮題)の零葉一枚が載っている。横山重氏はこれを古浄瑠璃の正本と見ておられる(同書解題、四四九頁以下)。寸法、四寸六分×六寸六分(およそ一三・九糎×二〇・〇糎)、匡郭、四寸×六寸五分(およそ一・二・一糎×一・九・七糎)、横本である。そして横山氏は、同じく口絵掲載の「たかたち」零葉との関係から、この「酒天童子」を寛永二年前後の刊行と推定された。即ち、「この一葉は、全体が寛永二年の「たかたち」に似てゐる。本の大ききや、匡郭の大ききや、又、挿絵が本文の字面の中に挿入されてゐることや、それから、挿絵の画風や、本文の字体などに至るまで、何から何まで、前記の「たかたち」にそっくりである。従つて、此本は寛永二年前後に刊行されたものであろう」(同、四五七頁)。「たかたち」の零葉が寛永二年刊行のものであることは同書一五頁以下の「たかたち」本文、およ

び三三三頁以下の解題を参照されたい」と。然して、「寛永二年正月の刊記があつて、整板の浄瑠璃正本として、又、刊記のある正本として、一ばん古い「装頓が横本」(同、三二七頁)の「たかたち」は、何からその本文(また絵)を取つてゐるのか。横山氏の解題を辿つて要点を箇条書すれば、(一)内容は元和寛永頃刊の舞の本「たかたち」と大抵同じであり、(二)「古浄瑠璃正本集」の校訂(註記)に使用の寛永頃整版丹緑本の舞の本「たかたち」と挿絵に共通したものが、(三)この舞の本「たかたち」は慶長か元和頃刊行の古活字本を覆刻したものと見られるので、(四)古浄瑠璃「たかたち」の挿絵は恐らく大部分がこの舞の本から構図を取つたものであろう、ということになる。

では、「酒天童子」の零葉に戻つて、この零葉の持つ意味を考える。この挿絵は、御伽草子本に極めて近い。そこで、本文共々、御伽草子本との関係を見る(図9・10を参照)。

まず本文は、

△零葉▽

とうしの御目にかゝる事、ひと
へに、まんのきやうしやのひき
あはせ、なによりもつて、うれ
しう候、一しゆのかけ、一かの

△御伽草子本▽

とうじの御めにかゝる事。ひと
へに、まんのきやうじやの御引
合せ。何よりもつて、うれしう
候、一じゆのかけ、一がのなが

なかれをくむ事も、みなこれ、たしやうのゑんとときく、おやとをすこしかし候へ、御しゆをもたせて候へば、おそれながら、とうしへも、御しゆひとつ申さん、われらもこれにて、御しゆたまはり、よもすからの、さかもりせんとぞ、おほせける、とうしはこれをき、さてはくるしうなき人かと、えんよりうへへ、よひあけて、なをもころを、しらんため、とうし申されけるやうは、もたせのさけも、ありときく、われらもまた、きやくそうたちに、御しゆ一つ申さん、それくと、ありければ、うけたまはると申て、さげとなつて、ちをしほり、てうしにいて、さかつきそへ、とうしかまへにそ、おきにける、とうし、さかつきとりあけて、ひとつうけて、さらりとほ

れをくむ事も。みな是、たしやうのえんとときく。御やとをすこしかし給へ、御しゆをもたせて候へば。おそれながら、どうじへも、御しゆ一申さん。われらも是にて、御酒給はり。よもすから、さかもりせんとぞ、申されける。どうじは此よし聞よりも。さてはくるしうなき人かと、えんより上へ、よびあけて。なをも心を、しらん為、童子申されけるやうは。もたせの御しゆの、ありときく、われらも又、きやくそう達にも、御しゆひとつ申さん。それくと、有ければ、うけ給はると申て。さげとなつて、ちをしほり。てうしに入て、盃そへ。どうじがまへにぞ、をきにける。どうじ、さかつきとり上て。頼光にこそ、さしにけれ。よりみつ、さかつきとりあけて、これもさらりと、ほされけり。

となる。終りの部分に不一致がやや目立つが、零葉の展開がこのあと不明な以上、何とも言えない。先ずは両本、極めて近いと言えるであろう。本文対比は、本来ならば御伽草子本の代りに寛永版を使つてなすべきであるが、寛永版は下巻しか存しない以上、今は止むを得ない。しかし第二節で見た如く、御伽草子本（の寛永版下巻に相当の部分）は寛永版（下巻）の本文をほぼ忠実に承けていると言ひ得るのだから、この關係を未だ発見されていない寛永版上巻と御伽草子本（の寛永版上巻に相当の部分）との關係にも当て嵌めて見ることが許されぬであろうか。つまり、右に引用した御伽草子本の本文は、寛永版のそれであり、寛永版を引用したに等しい、と見ることは許されぬことであろうか。もしこの考えが首肯されるならば、右の本文対比は、寛永二年頃の古浄瑠璃正本と寛永版との対比であるとも言ひ得ることになる。勿論この様な、推測に推測を重ねての論の展開は、著しく厳密さを欠いた不当なものであり、その分危険の度合いも大きいことは十分承知している。しかしながら、今の所はこの様に考えて何ら齟齬を来たすものではないと考える。

それでは、右引用の両本は何故こうもうまく対応しているのだろうか（終りの部分の不一致は、恐らくは古浄瑠璃本の省筆か。童子が頼光らに血の酒を勧めているのだから、盃を頼光にさすとする御本が自然な様でもあるし、先に童子が干すとあつても文脈上不自

然さはない。今は何とも言えない)。その解明は挿絵をも検討した上でなされねばならぬであろう。

図を見て頂いても分かる通り、零葉の挿絵(図9)はやや中途半端である。が、御伽草子本の挿絵(第五図、図10)の右半分と較べれば、ほぼ完全に一致していることは否めない。これはどういうことなのか。御伽草子本は古浄瑠璃正本に依ったのであろうか。そうとは考えられない。それは、第二・三節で見た寛永版(下巻)と御伽草子本の関係よりして明白である。この御本の絵は寛永版(未だ発見されていない上巻)から来ていると考えざるを得ない。寛永版の挿絵に童子の立姿と、縁に控える頼光主従の構図があり、御本はそれをヨコ形に置き直しただけなのであろう。では、寛永版から古浄瑠璃正本が出来たと考えるのはどうか。これも俄には成り立たぬであろう。古浄瑠璃の「酒吞童子」は、先記「たかたち」との関係から寛永二年前後の刊行だとする横山氏の説は正当であろう。そして今回問題にしている「酒吞童子」が寛永版であることも版式・挿絵の特色よりして明白である。そしてその寛永版が寛永二年前後より更に早いものだと考え難いのである(もしそうなら殆ど元和版ということになる。そこまで引き上げることは無理である)。

古浄瑠璃零葉の本文と絵、それに対応する御伽草子本の本文と絵、また寛永版と御伽草子本の関係、これらを手早く説明する方法

はないであろうか。わたくしはここで、これら諸本の間を解決するものとして、更なる一本を想定したい。「酒吞童子」に古活字版が存したと考えればどうであろう。総ては一挙に解決するのではなか。つまり、

(一)「酒吞童子」には古活字版が存した。

(二)それを承けて寛永版が作られ、

(三)その寛永版から御伽草子本が作られた。

(四)他方、古活字版に基づいて古浄瑠璃正本が作られた。

と。この様に考えれば寛永版と御伽草子本の間はより明瞭になるであろうし、古浄瑠璃零葉の挿絵(先記「たかたち」の例を参照)の説明もつくと思ふのである。

そこで、これまでに知り得た、またその存在を推測し得た、未だ乏しい「酒吞童子」刊本諸本を試みに系統付ければ、およそ次の様になるであろう。

〔古活字版〕↓寛永版↓御伽草子本

←古浄瑠璃正本(寛永二年前後)

この伝本の系譜は丁度、古活字版の存否また寛永版の存否が逆であることを別にすれば、旧稿で「横笛」について見たのに等しくなる。わたくしはやはり、御伽草子二十三篇の少なくとも幾篇かについては、古活字版↓寛永版↓御伽草子本その他へ、の一つの線が成り立

つことを主張したく思う。そして「酒吞童子」には、まだまだ発見、報告されていない刊本が多くある筈であり、あつて然るべきであるとも思うのである。

五

さて、わたくしは本稿とは別に、「酒吞童子」の刊本につき、いささか気付いたところを発表の予定である（「解釈」昭58・10月号、「渋川版『酒吞童子』の位置」）。その稿を投じたのは既に一年以上も前のことであり、その時点では、まだ寛永版が御伽草子本に繋がって行く重要な本であるとの認識は曖昧なままであった。

その稿は、物語の前半に見える、大江山の鬼神を退治すべしとの勅命を受けた頼光主従が大江山の谷峠を分け登る途次に見出した三翁の、その名乗りのうち、住吉社の言う「津のくにのかけのこほりの者にてあり」に注目してのもので、この文言が伽本「酒吞童子」の本文整定期をおぼろげに示しているのではないかとしたものであった。そして津の国「かけのこほり（欠郡）」の用例を幾つか挙げてのち、この地名はおよそ足利末期から江戸極初期にかけて頻出するのであつて、就中、文禄三年の豊臣秀吉朱印状および元和元年の徳川家康墨印書にみえる「欠郡住吉」の例を貴重と見たのであつた。つまり、伽本「酒吞童子」中に見える内部徴証よりして、伽本

の本文そのものは江戸極初期に成立していたとしても決して不自然ではないと考えたのであつた。

いま、その様に考えたことが寛永版を精査して得た結論と何ら矛盾するものではないことに安堵するものである。併せて、更に寛永版に先行する本として古活字版を想定したこともあながち無稽なことではないと思う。なお加えて、住吉社の名乗りを津の国「かけのこほりの者」とする本の総ては、絵巻・奈良絵本・刊本を問わず、御伽草子本系の（むしろ、いまは寛永版系の、と言うべきか）本文であると言いつつ支障ないとも思うのである。

以上、本稿は、寛永版「酒吞童子」（下巻）を中心に据えることで、御伽草子本の性格解明・位置付けを試みたものである。大方の御批判をお願い申し上げる次第である。

（付録）

以下に付録として、舞鶴市立西図書館糸井文庫蔵、「寛永」刊「しゆてんとうし」下巻の全文を翻刻して大方の便宜に供する。

わたくしに読点をやや多く入れ、改行を施した他は、句点を含めて総て原本に忠実であることに努めた。

図版掲載、本文翻刻をお許し下さった舞鶴市立西図書館に対し、厚く御礼申し上げます。

しめてんとうし 下 (内題)

そのうち、しめてんとうしは。よりみつの御すかたを、めをもはな
さず、うちながめ。さてもふしきの人々や、御身がまなごを、よく
みるに。らいくわうにて、おはします、さてそのつきは、いばらき
か、かひなをきりし、つなにてあり。のこる四人の人々は、さだみ
つ、すゑたけ、きんときや。ほうしやうとこそ、おほえたり。我ら
かみるめは、ちかふまじ、いぶしう候、おたちあれ。これにありお
ふ、おにどもよ、心ゆるして、けがするな。われらも、まかりたつ
ぞとて。色をかへてぞ、ひしめきける。

らいくわう、此よし御らんして。こゝをちんじそんするならば、こ
との大事と、おほしめし。もとより、ぶんふ二だうの人なれば。す
こしもさはがぬけしきにて。からくくと、うちわらひ、さてもうれ
しの、おほせかな。日本一のつはものに、山ぶしともか、にたると
や。そのらいくわうも、すゑたけも。なをきくたにも、はじめにて、
ましてめに見ることはなし。たゞ今、おほせをよくきけば、あくき
やくぶたうの人ときく。あらもつたいなや、あさましや、さやうの
人には、にるもいや。われらがきやうの、ならひととして、ものゝい
のちを、たすけんため。山ちを家とする事も、うへたるこらうに、

身をあたへ。うじやうひじやうを、すくはんため。

しやかむにによらいの、いにしへは、しうふうと、なをつけて。し
よこくをしゆきやうに出給ふ、あるとき、山ちをとらせ給へば、
ふかきたにの、そこよりも。なにもものなるとは、しらねども、しよ
きやうむしやうと、となへければ。たにくんだりて、御らんずるに、
九そく八めんの、きじんとて。かしらは八つに、あし九つ。まもお
そろしき、おにそある、しうふう、かれにちかつきて。たゞ今とな
へし、はんげのもん、われにさつけよかしとある。きじん、こたへ
ていふやうは、さづけんことは、やすけれと。うへにのぞみて、ち
からなし、人の身をたに、ふくするならば。となへんところ申ける。
しうふう、此よしきこしめし、それこそ、やすきことなるべし。の
こりのもんを、となふるならば。なんちかゑしきに、それかしなら
んと、仰ければ。きじん、なめによろこびて、のこりしもんをぞ、
となへける。せしやうめつほうしやうめつくゝい。じやくめついら
くと、なへければ。

しうふう、これをさづかりて、あらりかたやと、らいしつ。き
じんがくちに、いらせ給へは。すなはち、ほまつとあらはれ、きじ
んはすなはち、びるしやなぶつ。しうふうは、しやかぶつなり、又
ある時は、これやこの。はとのほかりに、身をかけしも、みなこれ、
いけるをたすけんため。

これにありあふ、山ぶしも、おなじぎやうにて候へは。もんを一つ、さづけつゝ、はやくいのちを、めさるへし、つゆちりほとも、おしからじと。さもありさうに、の給へは。

どうじは、これに、たばかられ、おもての色を、なをしつゝ。仰をさきは、ありがたや、かのやつはらか、これまでは。よもきたらじとは、おもへとも、つねに心にかゝるゆへ。あひても、ほんぢわすれすとて。御ちさんの、さけにゑひ。たゞくり事と、おほしめせ、あかきはさけのとがそかし。おにとなおほしめされそよ。われもそなたの御すがた、うちみには、おそろしけれと。なれてつほいは山ふしと。うたひかなで、心をうちとけ、さしうけ、のむほとに。これぞ、じんべんきどくの、さけなれば。五ざう六ふに、しみわたり、心もすかたも、うちみだれ。いかにありおふ、おにともよ、かくめづらしき御しゆ一つ、御まへにて、くたされて。きやくそうたちを、なぐさめよ、一さしまへとぞ、仰ける。

うけ給はると、たつところを。よりみつ、此よし御らんじて。まつ御しゆ一つ、申さんとて、ならびゐたりし、おに共に、くだんのさけを、もりたまへは。五ざう六ふに、しみわたり。ぜんども、さらにわきまへす、され共その中に。いしくまどうしは、ずんとたつて、まふたりける。みやこより、いかなる人の、まよひきて。さげやさかなの、かざしとはなる、おもしろやと、をし返し、二三へんこそ、

かなでける。此心をよくきは、これにありける、山ふし共を。さげやさかなに、なすべしとの、うたの心と、おほえたり

〔挿絵 第一圖〕（４ウ）

やがて、らいくわう、おしやくにこそは、たゞれける。とうじかうけたる、さかづきを、つなは此よしみるよりも。ずんとたつてぞ、まふたりける。としをへて、おにのいはやに、はるのきて。かぜやさそひて、はなをちらさん、おもしろやと。これも又、をし返し、二三へんこそ、まふたりける。此うたの心もち、これにありあふ、おに共を。あらしにはなちるごとくに、なすへしとの。うたの心を、おにはすこしも、きゝしらす。あらおもしろやと、かんじつゝ、したひくゝに、ゑひはれて。

どうじ、申されけるやうは、いかにありあふおに共よ。きやくそうたちを、よまになくさめ申へし。それかしが、だいくわんには、二人のひめを、のこしをく。それにしばらく、おやすみあれ。明日たじめん申へしとて、どうじは、おくにぞいりにける。のこるおに共、どうじの、かへらせ給ふをみて。こゝやかしこに、ふしたるは、さながら、しにんのことくなり。

らいくわう、このよし御らんして。二人のひめきみを、ちかつけて、御身たちは、みやこにては。たれのひめにて、ましますぞ。さん候、みづからは、いけだの中なこんくにたかの、ひとりひめにて、有け

るか。ちかきほどに、とられきて、こひしき、ふたりのちゝはゝや。おちやめのとに、あひもせで、かくあさましき、すがたをは。あはれとおほしめせやとて、たゝさめゝと、なき給ふ。今一人のひめきみはと、ゝはせ給へは。さん候、みづからは、よしたのさいしやうの、をとひめにて、さふらひしか。中々、いのちのきえやらで、うらめしきよと、かきくどき。二人のひめきみ、もろ共に、こゑもをします、きえ入やうに、なき給ふ。

よりみつ、此よしきこしめし、たうりなり、ことはりなり。さりながら、おにを、こんや、たいらげて、御身たちを、みやこへ御とも申つゝ。こひしき、ふたりのちゝはゝに、げんざんさせ申へし。おにのふしどを、われゝに、みち引給へと、ありければ。ひめ君たちは、きこしめし、これはゆめかや、うつゝかと。そのぎにて有ならは、おにのふしどを、われゝか。よきにあんない申べし、御よういあれと、有ければ。らくくわう、なめめに思しめし。そのぎにて候はゝ、めんゝ、物のくし給へとて。まづかたはらにそ、しおばれける。

よりみつの、出たちには。らんでんくきりと申て、ひおとしの、よろひをめし。三じやのかみの、給はりし、ほしかふとに。をなしけの、しゝわうの御かふと、をしかさねて、めされつゝ。ちすひと申せし、つるぎをもち。なむや八まん大ぼさつと、心のうちに、きね

んして、すゝみ出給ふ。のこる五人の人々も、思ひゝの、よろひをま。いづれもおとらぬ、つるぎをもち。女はうたちを、まきにて、心しづかに、しのひゆく。

ひろきさしきを、さしすきて、いしはしを、うちわたり。うちのをみ給へは、みなゝ、さけにまひふして。たそとゝがむる、おにもなし、のりこへゝ、み給へは。ひろきさしきの、その中に、くろかねにて、やかたをたて。おなじとびらに、くろかねの、ふとまきくわんぬき、さし立て。ほんぶのちからに、なかゝに、内へ入べきやうはなし。

らうのひまより、うちみれば、四はうに、ともしびたかくたて。てつでうさかほこ、たてならべ。とうじがすかたをみてあれば、よひのかたちと、かはりはて。そのたけ二丈たけあまりにして、かみはあかく、さかさまに。かみのあひより、つのおひて、ひげもまゆげも、しげりあひ、あしては、くまのごとくにて、四はうへ、あし手をうちなげて、ふしたるすかたを、見るときは、身のけも、よたつはかり也。

ありかたや、三神三神あらはれ給ひつゝ。六人のもの共に、よくゝ、これまで参りたり。さりながら、心やすく、おもふべし。おにのあし手を、われゝか、くきりにて、つなきつゝ。四はうのはしらに、ゆひつけて、はたらくけしきは、あるまじきぞ。よりみつは、くひ

をきれ、のこる五人のもの共は。あとやさきに、立まはり、ずん／＼に、きりすてよ。しきいはあらじと、の給ひて、もんのとびらを、／＼しひらき、かきけすやうに、うせ給ふ。さては、三じやのかみたちの、これまで、あらはれ給ふかと、かんるい、きもにめいしつゝ。たのもしくは、思へとも、おしへにまかせて。らいくわうは、かしらのかたに、立まはり。ちすいを、するりとぬき給ひて。なむや三じやの御かみ、ちからをあはせてたひ給へと。三どらいして、きり給へは、きじん、まなこをみひらきて。なさけなしとよ、きやくそうたち、いつはりなしと、き／＼つるに。きじんにわうどうなき物をと。おきあがらんと、せしかとも。あしては、くさりにつながられて、おくべきやうの、あらされは。おごゑをあけて、さけぶこゑ、らいでんいかつち、天地もひ／＼はかりなり

〔挿絵 第二図〕（９才）

もとよりも、つはもの共。かたなはつるきたちはやに、ずん／＼に、きり給へは。くびは天にぞ、まひあかる。らいくわうを、めにかけて、た／＼かみにと、ねらひしが。ほしかぶとに、をそれをなし、その身に、しきいはなかりけり。あし手どうまできり。おほにはきして、出給ふ。

あまたのおにの、その中に、いばらきどうじとなりて。しうをうつ、やつばらに。てなみのほどを、みせんとて、おもてもふらす、

かゝりける。つなは、此よしみるよりも、てなみのほどは、しりつらん。めに物みせてくれんとて。おふつまくつつ、しはしがほと、た／＼かひけれとも。さらにしやうぶは、見えざりけり、をしならべて、むすどくみ。うへを下へと、もて返す、つながらからは三百人。いばらき、ちからやつよかりけん、つなをとつて、をしふする。らいくわう、此よし御らんして、はしりかゝつて、いばらきか。ほそくび、ちうにうちをとせは。いしくまどうし、かねどうし、そのほか、もんをかためたる。十人あまりの、をに共か、此よしをみるよりも。今はどうしも、まします。いづくをすみかど、なすへきぞ、おにのいはやも、くつれよと。おめききけんで、かゝりける六人の人々は、此よしをみ給ひて。やさしのやつばらや、手なみのほどを、みせんとて、ならい給ひし、ひやうほうを、とりいたさせ給ひて。あなたこなたへ、おひつめて。あまたのおに共、こと／＼く、たいらけて。しばらく、いきをそつがれる。

よりみつ、仰げるやうは、いかに女ばうたち、はや／＼、出させ給ふへし。今はしきいも候まじと、仰ければ。このこゑを、きくよりも、とられてまします女はうたち。人やのうちより、ころびをち。らいくわうを、めにかけて、これはゆめかや、うつ／＼かや。われをたすけてたひ給へと、われも／＼と、手をあはせて、なげきかなしむありさまを、物によく／＼、たとふれば。つみふかきさい人か、

ごくそつの手にわたり。むけんちこくに、をとされしを。ちぞうぼさつの、しやくちやうにて。をんかあかみせんさいそはかと、すくひとらせ給ひしも。かくやと愿ひしられたり。

そのとき、六人の人々は、ひめ君を、さきにたて。おくのていを、み給へは、くうでんらうかく、玉をたれ。四せつの四きを、まなびつゝ。いらかをならへて、たてたるは、心もことはもをよはれす

〔挿絵 第三圖〕（11ウ）

又かたはらを、み給へば、しこつはつこつ、なましき人。あるひは人をすしにして、めもあてられぬ、その中に、十七八の上らうの、かたうでをとし、もゝそがれ。いまだいのちはきえやうて、なきかなしみて、ましますを、よりみつ、此よし御覽じて。あのひめ君は、みやこにて、たれのひめにて、ましますぞ。ひめきみたちは、きこしめし、さん候、あれこそは。ほり川の中なごんのひめきみにてきふらふとて。いそぎ、そばにはしりよりて。いかにひめきみ、いたはしや、みつから共は、きやくそうたちの。おに、ことゝくたいらけて、みやこへ、つれてかへらせ給ふが。御身一人、のこしをき、かへるへきかや、かなしやな。かくおそろしき、ちごくにも、御身に心のひかされて。あとに心の、のころぞと、かみかきなでゝ。なに事にても、御心におほしめさるゝ事あらば。われゝに、かたらせ給へ、みやこへのほりて候はゝ。ちゝはゝに、よきにとゞけて参

らすべし。ひめきみいかにと、ありければ

此よしを、きこしめし。うらやましの人々や、かくあさましき、つゆのみの。はやくもさきに、きえもせで、かやうのすがたを人々に。みせ参らする、はつかしきよ、みやこにのほらせ給ひつゝ。ちゝはゝの、此ことを、しろしめされてあるならば。わか身の事を、申々に、なげき給はん、かなしきよ。かたみはおもひのたねなれど、ひめがかたみと、の給ひて。わがくろかみを、きりてたべ、又此こそでは、みつからか。さいごのとしまで、きたるこそでと、の給ひて。そのくろかみを、ゝしつゝみ、はゝうへさまに、参らせて。こせをは、とふてたひ給へと。よくゝと、とゞけてたび給へと。いかに、あれなるきやくそうたち、かへらせ給はぬ、そのさきに。みつからには、とゞめをさして給はれとて、きえ入やうに、なき給ふ。

らいくわう、此よしきこしめし。げにだうりなり、ことはりなり、さり。なから。みやこにのほりて候はゝ、ちゝはゝに、此事を、よきにあんない申つゝ。明日にもなるならば、むかひの人を、くだすべし。いとま申て、さらばとて、ものうきほらを、たち出て。たにみねすきて、いそがせ給へは、ほどもなく。大え山の、ふもととなる、しもむらのざいしよにつく。よりみつ仰けるは、いかに所のものともよ。いそぎ、てんまをふれさせて、女ぼうたちを、みやこへをくるへし。いかにゝと、ありければ、うけたまはると申とき。

そのころ、たんばのこくしをは、大みやの大じんどのとそ、申けるか。此よしを、きこしめし、さてもめてたきしだいとて。いそぎ、ざつしやうかまへ、参らせける。そのひまに、むまのり物にて、人々を。みやこへをくり給ひける。みやこには、この事をさくよりも。らいくわうの、御のぼりを、けんぶつせんとて。さどめきわたりて、ひかへたり

〔挿絵 第四図〕 (15才)

その中に、ひめをとられし。いけだの中なごんふうふの人も、出給ひ。いづくまでも、あひしだいと、むかひに出させ給ひしが、よしみつを、みつつけつ。すはやこれへと、の給へば。はやひめきみも、御らんじて。はうへさまとて、なき給ふ。はうへ、此よし御覽じて、するくと、はしりより。ひめきみに、とりつきて、これはゆめかやうつか。きえ入やうに、なき給へば。中なごんも、きこしめし、一どはなれし、わがひめに。二たびあふこそ、うれしけれと。いそぎ、しゆくしよに、かへらせ給ふ。

よしみつは、さんだい有。みかど、あいらんましくと、御かんは申はかりなし。御ほうび、かぎりなかりける。それよりも、こくとあんせん長久に、おさまるみよとそ、なりにける。かのらいくわうの御手がら、ためしすくなき、ゆみとりとて。かみ一人より、下ばんみんなにいたるまで、かんせぬものはなかりける